相模大山の茶湯寺参りについて

田中宣一

一

相模国大山（阿夫利山ともいう）を信仰の中心に据える大山講の分布について小論を発表した際、[1] 大山信仰の諸相についても、簡単に触れておいた。農業に必要な雨をもたらしてくれる山として崇める農民の信仰、山あてとして有用であることから豊漁を祈願するようになった漁民の信仰、商売繁昌等を祈願する都市部の職人・商人等の信仰のほか、生業には関係なく成年に達した男子が初山と称して登拝することや、死後に霊魂が行きつく所と想定されていたらしいことが、大山信仰の中にあることを述べたのである。この最後の死霊鎮留の地とする部分は、死後百一日目または百日目に山麓の茶湯寺に参詣すると途中で亡くなった人に必ず会えるとする伝承が、或る範域の人々に信じられていることからの推測であった。

本稿の目的は、このいわゆる茶湯寺参りの実態を述べるとともに、その意味を考えて大山が死霊鎮留の地と考えられていたのではないかという推測を確実なものにすること、および茶湯寺参りがどの範域の人々によって支持されているのかを明らかにすることにある。

二

神奈川県伊勢原市大山七四四にある通称茶湯寺（ちゃとうでら）は、正式には誓正山涅槃寺といい、浄土宗の寺院である。涅槃寺は、それまで大山に散在していた西迎寺・西岸寺・相頓寺（いずれも浄土宗）が合併して、昭和二十七年に西迎寺の地に新たに創建されたものである。[2] もちろん、檀家もある。

ここへ人の死後百一日目に参ると、その途次亡くなった人とそっくりの人に会えるといわれ、参詣人は後を絶たないのである。一方寺院側では、参詣人の依頼を受けて釈迦涅槃像の前で茶湯供養をし、お札を発行している。本稿ではこれらを「茶湯寺参り」と総称することにするが、その次第は次の通りである。

まず供養を希望する人が涅槃寺を訪れ、死者の戒名・死亡月日・死亡時の年齢・俗名と施主の住所・氏名・死者との関係等を記帳して、茶湯供養を申込む。

寺側では、施主を本堂に案内し、釈迦涅槃像（通称寝釈迦さん）の前に灯明を点じ、木版刷の釈迦涅槃像のお札と陀羅尼のお札、およびお湯の中にお茶の葉を浮かべたもの、紅白の菓子等を供えてから焼香し、秘経を読誦する。この時、釈迦涅槃像と陀羅尼のお札に、死者の霊が乗り移っていると考えられているのである。[3] 供養のあと、釈迦涅槃像のお札と陀羅尼のお札、および少々のお茶の葉と紅白の菓子を施主に渡し、前者の札は帰宅後仏壇に納めておくように、また後者の札はすぐに墓地に埋めるようにと指導している。お茶については、一般に死者百日目までは水を供え百一日目からはお茶で供養するので、この時渡す少量のお茶の葉が、各家庭における最初のお茶供養に用いられるのだと考えられているのである。

それらをもらったあと、人々は、亡くなった人に相似た人に途中で会えることを期待しながら、帰途につくのである。[4]

涅槃寺が茶湯寺と通称されるゆえんは、現在右のような茶湯供養を奉修しているからである。しかし、涅槃寺イコール茶湯寺ではない。茶湯寺とは茶湯供養をする寺の謂であるから、他の寺で茶湯供養をすれば、必然的にそこが茶湯寺と呼ばれるようになるはずである。

それでは涅槃寺（その前身の西迎寺・西岸寺も含めて）にお

ける茶湯供養は、いつごろから行なわれているのであろうか。涅槃寺で発行しているパンフレット「百一日参りの由来」によると、「……茶湯寺は開山以来九百年の伝燈を継承する秘法百一日茶湯供養を奉修しますが……」とある。しかし、寺には確かにそういう伝承はあるのであろうが、記録等が残されているわけではなく、確たることは何とも言えない。

明治三十二、三年頃にまとめられたという「大山史」巻上[5]には、

……観音寺は阿夫利神社本地仏を奉祀せる所、真言宗にして明王寺末たり。西迎寺は浄土宗にして、釈迦涅槃像を以て有名なり。里俗之れを寝釈迦と云ひ、死亡者あれば四十九日に此寝釈迦に茶湯を供するを例とせり。今は其寺焼けて無を以て仮りに観音寺境内に安置す。……

とある。すなわち、浄土宗西迎寺が釈迦涅槃像を有して茶湯供養をしていたが、火災に遭ったので、厄をまぬかれた釈迦涅槃像を、その当時観音寺境内に仮安置していたことがわかる。

右の記事と、大正時代初期に観音寺境内から釈迦涅槃像が白い布に包まれて現在地（当時西迎寺と称していた所）に移されたという古老の話[6]、および前々から引き継いで現在も使用している釈迦涅槃像の木版に西岸寺と記されていること等々を勘案すると、明治以降において茶湯供養をしていたらしい寺は、西迎寺・観音寺・西岸寺等々であることがわかる。といってもこれら諸寺が併行して行なっていたのではなく、諸種の事情から寺々持ち廻りで行なっていたようである。このうち観音寺（真言宗）の場合には、観音寺自体が茶湯供養をしていたというよりも、この寺の境内に火災に遭った西迎寺の釈迦涅槃像を安置させていただけであるから、供養の実修主体はあくまでも西迎寺であったと思われる。したがって明治以降では、西迎寺・西岸寺が茶湯供養の寺であったと考えてよい。そして既に述べた通り、この両寺が合併して涅槃寺になったのであるから、現在の涅槃寺の茶湯供養の伝統は少なくとも明治中期までは遡ることができ、以後大正・昭和と続いていることは確かである（ただそれを行なう日について、「大山史」記載の四十九日目と現在の百一日目との相違の理由は未詳である）。

それ以前はどうであろうか。

『新編相模国風土記稿』[7]（以下『風土記』と記す）の大住郡

坂本村（この坂本村が現在の大山の人家のある所）の西迎寺・西岸寺の箇所には、

○西迎寺　誓正山引接院と号す、浄土宗（江戸芝増上寺末、）　開山西蓮社迎誉来給、本尊弥陀、△稲荷社　△紫雲庵　本尊地蔵

○西岸寺　霞川山大岌院と号す（本寺前に同、）　開山大岌（天文五年八月三日卒、）　本尊弥陀（良弁作、長二尺三寸五分、）　△薬師堂　本尊は慈覚作（長一尺一寸五分、）　△稲荷社

と記されているだけで、釈迦涅槃像とか茶湯供養の件は全く記載されていない。その寺の所持する仏像等について比較的詳細に述べている『風土記』の態度から考えても、記載がないということは、当時はこの両寺ともまだ釈迦涅槃像を中心とする茶湯供養を奉修していなかったと判断してもよいと思う。

一方、『風土記』の大住郡大山（ここには大山山内の様子が説明されている）の箇所には、

……（前不動の脇坊としての）光円坊（開基秀快、元禄八年六月十四日卒、当坊を茶湯寺と称す、来由は来迎院の条に弁ず、）……○来迎院　女坂の右にあり、密空山大山寺と号す、古義真言宗（八大坊末、）　開山義範（寛治二年十月五日卒、）　中興弘誉（寛永九年正月三日卒、）　本尊弥陀、当寺は別当八大坊、及山上寺院の菩提寺なり、此寺を土人茶湯寺と唱ふ、こは近辺の農家、死者ある時百ケ日に当る日、当山不動へ参詣す、其時死者の法名を記し、当寺に来て茶湯をうく、故にかく呼べり、又脇坊光円坊にも此事あり（圏点は筆者）

とあり、江戸時代後期には、坂本村（大山のうち人家のある所）の西迎寺・西岸寺へではなく、人々は大山山内の不動堂へ死者百ケ日目に参り、帰途、その当時茶湯寺と呼ばれていた光円坊や来迎院へ立寄って茶湯供養を依頼していたことがわかる。ただし、釈迦涅槃像については記載されていない。

『風土記』より以前については、記録がないので具体的なことはわからない。

以上述べたことを纏めると、次の通りである。

①近親者に死者の出た場合に参る場所――江戸時代後期には大山山内の不動堂に参っていたが、少なくとも明治時代中期以降は山麓の西迎寺または西岸寺に行き、現在ではその両寺の系統をひく涅槃寺に参っている。

②その時に茶湯供養を依頼する寺――江戸時代後期には大山山内の光円坊もしくは来迎院であったが、少なくとも

明治時代中期以降は山麓の西迎寺または西岸寺になり、現在では涅槃寺となっている。

③供養に行く日――江戸時代後期には死後百ケ日目であったが、明治時代中期には「大山史」によると四十九日目であり、現在は百一日目である。

④釈迦涅槃像――江戸時代後期（少なくとも『風土記』編纂時）にはなかったらしいが、明治時代にはすでに存在し、現在ではこの前で茶湯供養を奉修するなど重要な役割を果たしている。

⑤お札の発行――江戸時代後期の事情は不明であるが、現在では茶湯供養をする寺において、釈迦涅槃像と陀羅尼との二種のお札を発行している。

右の諸点について、少し検討を加えてみたい。

まず少なくとも明治時代中期以降には、①②ともに山麓の同じ所に行っているが、江戸時代においては、死者の出た際に参る場所とその際茶湯供養をしに行く寺とが別であり、かつともに大山山内であったということは、注目すべきことである。同じ大山山内とはいっても、当時不動堂のあった場所と前不動堂の脇坊である光円坊の場所とでは、急な山道を成年男子の普通の歩き方で三十分ほど距っており、光円坊の方が下であった。また、不動堂と来迎院の場所とでは同じく十五分ほどの距離があり、来迎院の方が下である。[8] したがって単に茶湯供養のためだけならば、わざわざ不動堂まで山道を登って行く必要はなかったのであるが、実際には不動堂に参詣している。というよりも、不動堂へ行くことの方が主たる目的であって、その帰途に光円坊とか来迎院に立寄って茶湯供養を依頼している感があるのである。これはどのように理解すべきことであろうか。

この不動堂というのは、当時雨降山大山寺と号していた不動堂のことである。大山（阿夫利山）の中腹に位置し、これが山内の中心であった。江戸時代には夏の約一ヶ月を除いて、諸人の参詣はここまでしか認められておらず、また夏山の期間中であっても、ここから上は女人結界の地であった。平素近辺の農家の人々が登山可能なのは、不動までだったのである。したがってここに来ることは、とりもなおさず大山（阿夫利山）そのものに登ることにほかならなかったと思われるのである。『風土記』でみる限り、不動には単に参詣するだけで、ここでは特に供養はしなかったようであるが、参詣者にとって供養をするしないが重要なのではなく、とにかく死者の百日目にここまで登ってくること

こそが必要であったのだと思う。

光円坊と来迎院、なかんずく来迎院は別当八大坊や山上寺院の菩提寺として、山内にあって死者供養をする場であった。そのために、在家の人々も死者百ヶ日に大山不動に参詣した帰途立寄って、茶湯供養を受けたのだと思われる。この種の寺は、大山周辺では、八菅（愛川町）にも茶湯寺という名前で存在していたし[9]、日向修験（伊勢原市）の場合にも浄発願寺がこれに相当するものとしてある[10]。恐らく他の修験道場にも同じ機能の寺院はあるのだろう。しかし近辺の農家の人々が死者ある時に参詣する風は、八菅の茶湯寺や日向の浄発願寺には見られず、大山の茶湯寺（光円坊・来迎院）のみのものであった。

その理由は、来迎院・光円坊それ自体が八菅の茶湯寺や日向の浄発願寺に比して特異な寺であったというよりも、それらが所を占めていた大山の地そのものが、八菅・日向と異なる場所として近辺の人々に受けとられていたからだと思われる。秀麗な山容を示して遮るものなく聳える大山（阿夫利山）が、周辺の人々に特別な心情を抱かせていたことは想像に難くないからである。

したがって近辺の農家の人々が、死者のあった百日後に日頃仰ぎ見ている大山へ登ることと、その帰途大山山内の光円坊・来迎院等へ立寄って茶湯供養を受けることとは基本的には別のことであり、元来は前者が主となるべきものであったと思われるのである。

しかし明治初期の神仏分離の際、平田門人の多かった大山の地に権田直助が招かれるに及んで、国学旋風は強く吹き荒れ[11]、大山山内からは仏教関係の建造物とか、死を連想させるものはほとんど追放されてしまった。もちろん不動堂は当時の場所からはるか下の方の来迎院の所に移転させられて、山号を雨降山大山寺から宝珠山明王寺と改め、代わって不動堂のあった山内の中心地には大山阿夫利神社が置かれることになったのである[12]。となれば、従来のようにこの場所へ死者百日目に参ることなど、とてもできるものではない。一方、光円坊・来迎院の茶湯供養も廃止させられてしまい、その機能が山麓の西迎寺・西岸寺の手にゆだねられたのである[13]。したがって明治時代になってからは、近辺の農家で死者があってもその百日目に大山に登拝することが不可能となり、山麓の西迎寺あるいは西岸寺に茶湯供養に行くだけになってしまったのである。

かくして、江戸時代においては、死者の出た百ヶ日目に

参る場所とその際に茶湯供養をした場所とが異なっていたものが、明治時代以降は両者の果たしていた役割を、ひとり西迎寺もしくは西岸寺が、さらに現在では涅槃寺が負うというように変わってしまったのである。

③の供養に行く日の相違については、百ヶ日目と四十九日目とはともに忌明けの日と考えられている日であることを指摘し、その日が選ばれた理由については後述するつもりである。百一日目という日についても、後述するつもりである。

④の釈迦涅槃像については、おおよそ次のような伝承がある。

釈迦涅槃像は、江戸時代末期に茨城県磯浜（大洗町）で漁師の網にかかって引き上げられたものである。その村でこの像をまつっていると豊漁が続いたので、漁民の喜びは大変なものであったが、ある夜、漁師の夢枕に立たれ、大山へ行きたいというお告げがあった。そこで漁師たちは相談の結果、大山講の縁をたよって大山の御師沼野嘉内氏宅に運び込み、大山寺への斡旋を依頼した。その後間もなく明治と改元され、神仏分離が発令されて大山寺解体という騒ぎになったため、西迎寺に預けたのである。[14]

年代は確定しえないが、間もなく明治に改元されたとあることから釈迦涅槃像が大山に運び込まれたのは『風土記』編纂以後であろうから江戸ももう終期と言ってよい頃だと思う。したがって、現在、涅槃寺において茶湯供養の中心存在のようになって、その木版刷の絵像まで配られている釈迦涅槃像（寝釈迦様）ではあるが、元来茶湯供養には必須のものではなかったということがわかるのである。[15] したがってここにも、茶湯寺参りの本質の変化を見てとることができる。

⑤のお札の発行については既に述べたことのほか、追加検討すべきものは持ち合わせていない。

さて右の考察によって、江戸時代後期において近辺の農家の人々が死者ある時その百日目に大山に登り、帰途山内の光円坊とか来迎院に立寄って茶湯供養をしたものが、明治時代以降は、山麓の西迎寺・西岸寺ひいては涅槃寺における釈迦涅槃像を中心とする現在の茶湯寺参りに変質したことが、明らかにできたと思う。

三

今までは寺における供養の仕方とか、記録に留められた内容を中心にして茶湯寺参りをみてきたが、次には、現在茶湯寺参りに出かけている側の民俗資料の分析を通して、考察を進めたいと思う。

まず各地における茶湯寺参りの実例を、狭い地域のものに片寄らないように心がけながら、数例挙げてみたい。

座間市新田宿――ほとんどの家で、亡くなった人に似た人に会えるというので死者百一日目に大山の茶湯寺参りをする。近親者だけで行く家もあるが、親戚・近所揃って小型バスで出かけ、帰りに旅館で昼食をしてくる例も多くなった。家によっては、百日目の供養を檀那寺ですませてから行くという。もらってきたお札は墓で燃やしたり、仏壇に貼ったりする。(16)

相模原市田名望地――死後百ヶ日に大山の茶湯寺にお参りに行くと、死者に似た人に会える。茶湯寺の裏山にあるお宮への途中でも会った。もし会えなくても、茶湯寺へお参りすれば死者は成仏するので供養になるという。(17)

愛甲郡清川村煤ヶ谷――ほとんどの家で、亡くなった人に似た人に会えるというので死者百一日目に大山の茶湯寺に参る。行くのは百一日目だが、百ヶ日の供養に行くのだと言っている。もらってきた寝釈迦さんのお札は、仏壇に貼っておいたり、墓で燃やす。(18)

伊勢原市日向・子易・下平間――死者の百日目に大山の茶湯寺へ参ると、途中で亡くなった人と生き写しの人に会えるという。茶湯寺では寝釈迦さんに参り、そのお札をもらってくる。帰りに茶を買ってきて、近所の人を呼んで茶を入れる。百ヶ日には埋めた墓が凹むから、墓ナオシをする。(19)

平塚市大野――死者の百ヶ日目に大山の茶湯寺に参り、寝釈迦の像と血脉を貰いうけ、これを墓地に埋めたり、位牌の裏に貼りつけておく。参詣の帰途茶を買求め、隣家に配る。(20)

茅ヶ崎市柳島――死者の百十日目に大山の茶湯寺にお参りすれば、道の途中で亡くなった人とよく似た人に会えるというので、よく参る。早い方がよいといって、四十九日目、百日目に参る人もいる。ミサキ除けのために行くのだという人もいる。拝んでもらってお札を貰ってくる

のだが、それは、仏様が旅の途中でカラスにいじめられているのを助けるためだという。このミサキ除けをしないうちは、イチッコ婆さんに口寄せをしてもらえなかったという。[21]

大磯町西小磯――死者の百ヶ日目には檀那寺で百日目の供養をしてもらい（四十九日で供養を終える家も多い）、百一日目には、百ヶ日の忌明け参りといって、大山の茶湯寺へお参りをする。帰ってから貰ってきたお札を墓に埋め、乱れた墓直しをする。茶湯寺の近くでは亡くなった人に似た人に会えるという。また、ここに参ってはじめて死者は成仏するという。[22]

大磯町生沢――埋葬後倒しておいた古い石塔を元の位置に直すことを、墓直しと呼んでいる。また百一日の宮参りといい、百ヶ日の塔婆を立てた翌日に大山の茶湯寺や蓑毛の閻魔堂へ家族がお参りに行く。[23]

中井町岩倉――昔は死者の百ヶ日目に大山の茶湯寺まで行って、ミサキヨケという色紙で作った一種のお払いを戴いてきて、墓直しの後、これでお払いをして墓地に立てた。今は檀那寺から戴いている。[24]

例示はこれくらいにとどめるが、現在大山の茶湯寺参りをする所ではどこでも、右の諸例と大同小異のことを行なっている。

なお、誰の供養のために参詣するのか。供養される人（死者）に年齢的な特徴はあるのかについて、涅槃寺で見せていただいた昭和三十六年二月から三十七年一月までの一ヶ年間の参詣者名簿から纒めたものが、第Ⅰ表・第Ⅱ表である。

第Ⅰ表　施主からみた被供養者数（昭和36年2月～37年1月）

施主からみた供養対象者	人数
祖父	5名
祖母	8
父	164
母	87
夫・主人	37
妻	62
兄	2
姉	1
弟	1
妹	2
嫁	1
子供	60
先祖代々	11
統柄未記入・その他	102
合計	543

第Ⅱ表　年齢別被供養者数（昭和36年2月～37年1月）

死亡年齢	人数
0歳～4歳	20名
5　～9	11
10　～19	16
20　～29	25
30　～39	16
40　～49	27
50　～59	81
60　～69	101
70　～79	121
80　～89	87
90　～	8
先祖代々供養	11
未記入・その他	19
合計	543

右の各例を整理すると、次のようになる。

(a)参る日――百日目、百一日目の両方がある（茅ヶ崎市柳島のみ例外的に百十日目とする）。

(b)参る目的――百ヶ日の供養のため、仏を無事成仏させるため、忌明けのため、似た人に会えるため等々が混融している。

(c)お札の処理――仏壇へ貼る、墓で燃やす、墓へ埋める等である。

(d)供養される人とその年齢――祖父母、父母だけでなく、夫や妻、子供の亡くなった場合にも茶湯寺参りをしているし、年齢も年寄りだけではなく、青壮年、赤児の場合にも行っていることが判る。要するに、行く所では誰が亡くなっても茶湯寺参りがなされるのである。

以下、(a)参る日と(b)参る目的に焦点を絞って考えてみたい。

参る日には百日目と百一日目とがあるが（百十日は例外として除く）、『風土記』の例では百日目であったことと、現在百一日に行きながら百日参りといっている例の多いこと、および供養日を百一日とする例が全国的に見てもないこと等から、百日目に参ることが本来のものと考えてよい。地元の檀那寺での百日の供養や墓直しをしてから出かけたので、徒歩の時代には翌日に行かざるをえず、いつの間にか翌日の百一日目が茶湯寺参りの日として定着したのではないかと思われる。

各地の葬送習俗をみると、死後初七日、二七日（十四日）、三七日（二十一日）、四七日（二十八日）、五七日（三十五日）、七七日（四十九日）と供養が続き、四十九日が過ぎると、「家の棟に留まっている死者の霊が離れる」「死者は仏の仲間入りをする」などといって忌明けとしている所が全国的に多く、あとは一年・二年と続く年忌になる。しかし、四十九日のあと百ヶ日の供養をしている所も少なくはないのである。

神奈川県の場合には、百ヶ日目には寺へ行って供養をするほか、この日を墓直し・墓起し・塚直しの日と言って、墓土を整理したり、埋葬の際に土饅頭に寄せかけておいた古い墓石を起こす例が多い。先の伊勢原市や大磯町生沢・中井町岩倉の例などはその一つであるが、類例は「百ヶ日はハカオコシとかハカナオシといって、墓の上の古い石塔をどけて平らにして塔婆を立てる」[25]（鎌倉市）・「百ヶ日にはハカナラシをする。土盛りを平らにする」[26]（川崎市）等々の

ほか、神奈川県立博物館の『民俗調査報告書1～8』などを見ても、県下に広く及んでいることがわかる。これらはとりもなおさず、百ヶ日目が死者の霊との重要な別れの日であることを意味している。そしてこの日以降は、それまで家の周囲にいた死者の霊がどこかへ行くことになるとみなされる。

では、どこへ行くのか。そこで注目されるのが、死者を無事成仏させるために大山へ茶湯供養に参るとか、忌明けのために参るとする考えであり、大山へ供養に行くと死者と生き写しの人に会えるとする伝承である。それに茅ヶ崎市柳島のように、この大山への参詣がすむまでは死者がまだ仏の仲間入りをしていないから、イチッコが仏の口寄せをしてくれないというのも注意すべき例である。これらは明らかに、大山に霊が鎮留するという考えを前提にした思想である。残念ながら、現在資料にははっきり大山を死霊鎮座の地とする考えは見当らないが、右のような伝承が広く行なわれている以上、かつて大山に対して死霊の籠る所という意識を持つ人々の多かっただろうことは、十分推測可能なことである。そして死霊が大山に籠る日が、死後百ヶ日目の供養を終えたり墓直しをすませた後と考えられていたがゆえに、近辺の人々の死者百日目の大山参詣の民俗が成立したと思われるのである。

死霊が一定期日を経たあと、附近の山や森に鎮まるとする考えは、わが国において普遍的である。高野山や恐山はその最も著名な山であるが、それほど広い範囲の人々に支持されていなくても、死霊の籠る山と考えられているものは無数に存在すると言ってもよい。死霊鎮留の思想が、既成宗教の関与によって複雑な山岳信仰の中に組み込まれてしまっているものも少なくはないが、その山岳信仰の分析によって、原初的な山中他界の観念を抽出することは不可能ではないのである。

四

現在の民俗の検討を経た上で、最後に再び『風土記』の内容に立戻ってみると、そこに記されている近辺の農家の人々が死者ある時に大山不動に参詣することは、大山（阿夫利山）を死霊鎮留の地とする意識に支えられての行動であったと考えて、間違いなかろう。それが死後百ヶ日目であったことは、既に述べた通り、この日が近辺の家々にお

いて死霊が家の周囲を離れる日であり、忌明けの日と観念されていたからである。それに比べて、光円坊・来迎院へ立寄って茶湯供養をすることは、山内においてそこが死に結びつく場所だったからだろうが、大山(阿夫利山)に行くことからみれば、本来は二次的なものであったと思われる。

明治初期の神仏分離の結果、大山一山が神道の支配にゆだねられるに及んで、死者供養のための大山参りがかなえられぬこととなり、それが単なる山麓の西迎寺・西岸寺への、そして現在では涅槃寺への茶湯参りの中に凝縮させられて存在しているのであろう。

以上のように考えてくると、現在の茶湯寺参りは、釈迦涅槃像(寝釈迦さん)に手を合わせて死者のために茶湯供養する仏教行事であるとともに、かつて大山(阿夫利山)が周辺の人々にとって死霊鎮留の地と考えられていたことを、われわれに示唆しているのである。

五

今まで、茶湯寺参りをしているのは大山周辺の農家の人人というように漠然とした言い方をしてきたが、最後に、その範囲と密度を確実に押さえておきたいと思う。

以下、表を示し、その解説をする形で説明していきたい。

第Ⅲ表――「市町村別茶湯寺参詣件数」について――

茶湯寺参りをすると、既に述べた通りまず記録簿に供養される人の戒名・俗名・命日・死亡年齢・施主との関係、施主の住所・氏名等を記することになっている。住職吉永氏のご好意によってそのうちの三冊を見せていただいたので、死亡年齢、施主との関係、施主の住所を写し、市町村別にまとめたのがこの表である。

一冊目は「昭和八年九月起、至九年十二月二十八日」となっている和綴の冊子で、そのうちの昭和八年九月一日から同九年八月三十一日までのものを参考にした。表の中で、「昭8」とするものが、これである。

二冊目は昭和二十三年のものであるが、残念ながら一月から十月二十四日までしか記載されていない。他の二冊と比べて約二ヶ月の不足があるので、同列に並べるのは正しくないが、戦後の混乱期の様子を示すものとして、十ヶ月分だけの統計であるとお断りした上で掲載することにす

る。表中で「昭23」とするのはこれであり、二ヶ月少ないがゆえに「＊」印をつけて、他と区別した。

三冊目は昭和三十六年二月以降二年分ほどのものであるが、昭和三十六年二月一日から昭和三十七年一月三十一日までのもの一ヶ年分を参考にした。表中で「昭36」とするのはこれである。[27]

これらの記録を見ると、正月三ヶ日からすでに参詣者があり、大晦日まで続いていることがわかる。また、茶湯寺参りが全部百一日目もしくは百日目ぴったりというのではなく、一周忌などというのもある。中には、特定の人の供養ではなく、「先祖代々供養」として参詣したのもあるし、部落役員が揃って無縁仏の供養に来ているのもある。昭和二十三年のものには、「レイテ島戦死」のように戦死と記され、その父母が供養に来ているのが目につく。終戦後三年を経て戦死が確認されたから茶湯寺に参ったのであろうが、その父母の心境を思いやると胸痛むものがある。また幼児のためにまだ若いであろう両親が供養に訪れている部分を写すのもつらいことであった。

次にA・B・Cの記号について説明する。Aは昭和三十六年現在の市町村名である。Bは原則として明治二十二年の町村制施行当時の町村名であるが、その後の合併によって変更したのを載せたものもある。Cは原則として江戸時代の村名（俗にいう部落名）である。

さて第Ⅲ表からわかることは、茶湯寺参りは大山講のように関東一円に広がっているものではなく、大山(阿夫利山)の見える範囲内のものであることである。見えても大山より西の方の秦野市・小田原市・足柄上郡・足柄下郡に少ないのは、秦野市簑毛の閻魔堂や小田原市板橋の地蔵が、茶湯寺の代りをしているからではないかと思われる。また、昭和八年の方が昭和三十六年より相当参詣者数の多いことがわかる。ただこの二ヶ年の比較だけで、時代が遡るほど、参詣者が多かったかどうかについては何とも言えないと思う。

第Ⅳ表――「昭和三十六年郡市別参詣率」について――

茶湯寺参りの実施密度を調べたものである。昭和三十六年一月から十二月までの郡市別死亡者数と昭和三十六年二月から同三十七年一月までの参詣数とを比較し、実際の死亡数の何パーセント参詣しているのかを見たものである。死亡日から百一日目に参詣するのだから、正確には死亡実数は百一日前までの統計を用いなければいけないのであ

る。少しずれがあることをお断りしておく。

なお、第Ⅲ表の市町村のうち、二宮・大磯・伊勢原町は中郡に、愛川町・清川村は愛甲郡に、座間・海老名・綾瀬・寒川町は高座郡に、藤野・相模湖・津久井・城山町は津久井郡に、それぞれ含めてある。

昭和三十六年当時は、神奈川県ではすでに人口の急増期に入っていた。したがって死亡者数の中には他県から移住した人のも多くある筈であるが、それにもかかわらずこれだけの参詣率があるのだから、元来から在住していた人の茶湯寺参詣率は相当高いと考えてよい。昭和八年の全郡市のものは作れなかったが、もっと高率になろうと思う。

第Ⅴ表――「昭和八年平塚市・座間村の参詣率」について――

神奈川県立図書館で見ることのできた昭和八年の統計書をもとに作成したものである。当時の平塚市は現平塚市内の中心部である本宿・新宿・馬入・須賀地区に当る。昭和八年とはいえ商業都市・工業都市として相当な賑いを見せており、新移住者も多かった筈である。そこでの約十五パーセントの参詣率は、相当高いと言えよう（昭和三十六年の平塚市は、昭和八年当時の現在の平塚市の中心部に周辺の農村部を合併したものである）。一方当時の座間村（現座間市）は純農村地帯と言ってよく、他からの移住者がまだ少ない頃ゆえ、約三十パーセントの高率を示しているのである。

（本稿を成すにあたり、涅槃寺住職吉永氏にはひとかたならぬお世話になった。また参詣者名簿の筆写については、平野文明・小川直之両氏の助力をいただいた。以上記して感謝の意を表します。）

〔註〕

（1）拙稿「明治初期における大山講の分布」（『成城文芸』83、所収）、昭53

（2）『新編相模国風土記稿』の大住郡糟屋庄坂本村（現在の大山の人家のある所）の条には、西迎寺と西岸寺は江戸芝増上寺末として記され、相頓寺は西岸寺末として記されている。しかし昭和二十七年当時には、西迎寺のみ建物を有して西岸寺・相頓寺は寺跡地があっただけであり、かつ現涅槃寺住職吉永氏がこれら三ヶ寺の住職を兼ねていたところから、西迎寺が西岸寺・相頓寺を事実上吸収する形で合併し、新たに涅槃寺として出発したのである。

（3）住職氏談。なお、筆者には仏教の知識が十分でないのでよくわからないが、ご住職の話によると、陀羅尼のお札と

いい供養の仕方といい、浄土宗のものとしてはやや異質なものだという。

(4) 涅槃寺の近くで大山参詣者相手に茶店を営んでいる橋本テル氏（明35生）の話では、涅槃寺での茶湯供養をすませた人が、お婆さんは亡くなったうちのお婆さんに本当によく似ているといって、店に飛び込んで来て休憩し、話し込んで行く人が時々あるという。また大山在住の高橋徳太郎氏（明37生）の話によると、氏がかつて平塚市の病院に入院していた時、同じ部屋にいた青年が高橋氏が大山の人だと知って、「自分は小さい頃母を亡くしたため父に連れられて大山の茶湯寺（涅槃寺）に参ったが、その帰途、どこかの女の人に泣きながら〝お母さん〟といってしがみつき、なかなか離れなかったと聞かされている。その女の人が恐らく亡母とそっくりだったのであろう。だから自分は、茶湯寺参りの帰途死者に相似た人に会えるというのは、本当だと信じている。」と語りかけてきたという。この二つのエピソードでもわかるように、涅槃寺への百一日参りの帰途亡くなった人に相似た人に会えるという考えは、生きているのである。

(5) 石野瑛編著『相模大山縁起及文書』（武相叢書）所収、昭6（昭48復刻）

(6) 伊勢原市大山在住の橋本テル氏（明35生）・高橋徳太郎氏（明37生）談。

(7) 『大日本地誌大系　新編相模国風土記稿』、昭37、雄山閣による。

(8) 現在の大山で説明すると、この不動は阿夫利神社下社の所にあった。光円坊は追分のあたり（ケーブル登り口の少し上）にあったと思われる。来迎院は現在の大山寺（いわゆるお不動さん）の所にあった。

(9) 宮家準編『修験集落八菅山』、慶応義塾大学文学部宮家準研究室、昭53

(10) 伊勢原市日向在住の小沢幹氏談。

(11) 神崎四郎『惟神道の躬行者　権田直助翁』、阿夫利神社社務所、昭12。『伊勢原町勢誌』、伊勢原町役場、昭38

(12) 沼野嘉彦「大山信仰と講社」（宮田登・宮本袈裟雄編『日光山と関東の修験道』、名著出版、所収）、昭54

(13) 数ある寺院のうち、なぜ西迎寺もしくは西岸寺にゆだねられたのか、その理由は未詳である。

(14) 根本行道『相模大山と古川柳』

(15) 前掲註（13）に同じ。

(16) 筆者聞書。

(17) 『相模川流域の民俗』（神奈川県民俗調査報告1）、神奈

川県立博物館、昭43

(18) 筆者聞書。

(19) 『県央部の民俗Ⅱ——伊勢原地区』(神奈川県民俗調査報告7)、神奈川県立博物館、昭49

(20) 『大野誌』、昭33

(21) 茅ヶ崎市文化資料館編『柳島生活誌』(資料館叢書5)、茅ヶ崎市教育委員会、昭54

(22) 筆者聞書。

(23) 『中地区民俗資料調査報告書』、神奈川県教育委員会、昭48

(24) 『足柄地区民俗資料調査報告書(2)』、神奈川県教育委員会、昭47

(25) 大藤ゆき『鎌倉の民俗』、かまくら春秋社、昭52

(26) 『川崎市最西部地区民俗総合調査報告』、川崎市教育委員会、昭46

(27) 現住職家が涅槃寺の前身西迎寺の住職に就任されたのは昭和八年のことゆえ、今回用いた昭和八年九月一日からの記録は、現存するものでは一番古い。これとごく近年の状態とを比較したいと思ったが、近年のものはあまりにも生生しくて施主に失礼になってはいけないという住職氏のご意向により、戦後のものとして、昭和二十三年一月から十月までのものと昭和三十六年二月から翌年一月までのものとの披見が許されたのである。

第Ⅲ表　市町村別茶湯寺参詣件数

A	B	C	昭8	*昭23	昭36
平塚	岡崎	馬渡	2		
		大句	3		
		矢崎	6		
		大畑	2	2	
		丸島	4		
		不明	4	2	1
	大野	真土	7	1	6
		中原上·下宿	3	3	2
		南原	5		
		打間木			1
		八幡	6	7	3
		四ノ宮	15	9	4
		豊田本郷	1	2	
		宮下	5	2	1
		小嶺	2		
		平等寺		1	1
		不明	9	9	1
	金田	寺田縄	6		2
		入野	4	3	1
		飯島			1
		長持	1		1
		不明	2		
	金目	広川	2	2	1
		片岡	1		
		北金目	5	1	
		南金目		3	
		不明	3		
	旭	高根			1
		山下	2	3	1
		万田		3	4
		纏	1		
		徳延	1	1	1
		根坂間	1	1	1
		河内	1	2	1
	土沢	上吉沢	2	5	1

A	B	C	昭8	*昭23	昭36
湯河原町			1	0	0
山北町川村岸			0	1	1
小田原市			0	0	1
橘町			0	0	1
二宮	吾妻	二ノ宮			1
		山西	1		
		不明	1	1	1
	合計		2	1	2
大磯	国府	国府本郷	13	2	
		国府新宿	12	4	2
		寺坂	2		1
		生沢	1	3	
		黒岩	1		
		不明	1		
	大磯	大磯宿	15	10	10
		東小磯	2		
		西小磯	3	6	10
		高麗寺	5		2
		不明	28	2	1
	合計		83	27	26
平塚	平塚	平塚宿	19	1	2
		平塚新宿	21	7	17
		馬入	7	6	18
		須賀	22	6	8
		不明	20	7	11
	神田	田村	10	10	6
		大神		3	2
		吉際	1	1	1
		不明	5	1	
	城島	下島	2	3	2
		大島	3	4	2
		小鍋島	4	4	
		城所	4	2	1
		不明	2	1	
	岡崎	上·下入山瀬	1		

（表つづき）

A	B	C	昭8	*昭23	昭36
伊勢原	比々多	神戸	2		
		坪之内	3		2
		三之宮・栗原	1	2	2
		不明	1	2	
	大山	子易	2	1	1
		坂本・大山	11	4	
	高部屋	日向	9	4	5
		上粕屋	6	2	3
		西富岡	5	1	3
		不明	4	3	5
	不明		1	1	2
	合計		116	72	66
厚木	厚木	厚木	22	8	20
	相川	岡田	2		1
		酒井	6	3	4
		下津古久			2
		戸田	9	3	2
		長沼	1		
		上落合	1		
		不明	5	1	
	南毛利	愛甲	3	12	3
		船子	1	2	
		恩名	4		
		戸室	3	2	4
		温水	4	2	6
		長谷	2	3	1
		不明	6	2	
	玉川	岡津古久		1	
		小野	4	1	
		七沢	2	2	6
		不明	5		
	小鮎	上古沢			3
		下古沢	1	2	2
		飯山	2	8	12
		不明	1	1	

A	B	C	昭8	*昭23	昭36
平塚	土沢	下吉沢	2	1	1
		土屋	2	3	1
		不明	3	3	1
	不明		2		
	合計		236	125	109
秦野	大根	下大槻	1		
		南矢名		1	1
		北矢名	1		
		落幡	3	1	2
	不明		1		
	合計		6	2	3
伊勢原	伊勢原	田中	1		1
		東大竹	3	9	4
		伊勢原			5
		板戸	1	2	4
		池端	2	3	3
		不明	19	6	2
	成瀬	石田	3	2	2
		見附島	2		
		下落合	1		
		下粕屋	2	4	1
		東富岡	3	1	
		粟窪			2
		高森	3	5	3
		不明	6	2	
	大田	小稲葉	5	3	6
		上谷			2
		下谷	3	3	2
		沼目	6	3	2
		上平間	2	1	1
		下平間		1	2
		不明	5	1	
	比々多	善波	1	3	
		笠窪			1
		白根	3	3	

（表つづき）

A	B	C	昭8	*昭23	昭36
津久井		三ヶ木	1		
		根小屋		2	
		不明	1	3	1
	合計		7	5	3
城山		川尻	2		
		中沢	1		
		葉山島			1
		小倉		1	1
		不明	3	1	
	合計		6	2	2
相模原	上溝	上溝	15	6	21
	大野	上鶴間	3		
		鵜ノ森			1
		淵野辺	4	2	3
		上矢部			3
		上矢部新田			1
	相原	橋本		1	3
		小山	1	2	1
		不明	2		
	大沢	上九沢	1		1
		下九沢	4		6
		大島	1	3	4
		不明	1		
	田名	田名	6	8	11
	新磯	新戸		5	4
		磯部		2	4
		不明	5	1	
	麻溝	下溝	4	2	6
		当麻	1	4	5
		不明	8		2
	不明		1	5	5
	合計		57	41	81
座間	座間	座間	5		3
		座間入谷	3		1
		新田宿	5	2	5

A	B	C	昭8	*昭23	昭36
厚木	依知	上依知	2		
		中依知	1		
		下依知	1		1
		山際	2		1
		金田	4	9	1
		不明	4	7	
	荻野	上荻野			1
		中荻野	2	4	1
		下荻野			1
		不明	4	1	12
	睦合	下川入	2		1
		林	1		
		妻田	6	5	6
		及川		1	1
		棚沢	1	1	4
		三田	3	2	1
		不明			
	不明		3		1
	合計		120	83	98
愛川	愛川	半原	2	4	5
		田代			2
	高峰	角田	1	3	6
		三増	1	4	2
		不明		1	1
	中津	八菅	6	3	3
	不明		5		1
	合計		15	15	20
清川		煤ヶ谷	13	3	8
藤野		牧野	0	1	0
相模湖		小原宿	1		
		不明	1		
	合計		2	0	0
津久井		鳥屋	3		1
		長竹	1		1
		中野	1		

（表つづき）

A	B	C	昭8	*昭23	昭36
寒川	寒川	宮山	1	1	
		小谷	1		
		不明	5	2	
	合計		13	15	13
茅ヶ崎	茅ヶ崎	茅ヶ崎	17	4	9
		小和田	2	1	
		高田		1	
		菱沼	1		
		下町屋	1		
		松尾			1
		柳島	3	2	2
		中島	1	4	1
		萩園			1
		円蔵		2	
		西久保			4
		不明			
	小出	堤			2
		下寺尾			1
		行谷		2	
		不明	10		
	不明			2	1
	合計		35	18	22
大和市			3	2	1
藤沢市			11	8	1
鎌倉市			1	2	1
三浦市			0	0	1
横須賀市			3	2	1
横浜市			18	1	4
川崎市			2	0	0
東京都23区内			8	2	6
〃 その他			5	3	7
住所不明			8	0	12
総合計			849	490	543

A	B	C	昭8	*昭23	昭36
座間	座間	四ツ谷	2		3
		栗原		3	1
		不明	11	4	
	合計		26	9	13
海老名	有馬	本郷	2	1	2
		上河内			1
		中河内	1	2	1
		中野	1	1	1
		社家			1
		門沢橋	1	2	
		不明	2	2	
	海老名	大谷	2		4
		国分	11	9	7
		河原口	2	4	4
		上郷	8	4	5
		中新田	2	1	
		上今泉	1	5	1
		下今泉		4	2
		柏ヶ谷	1	1	
		望地		3	
		不明	13	8	4
	不明				1
	合計		47	47	34
綾瀬	綾瀬	寺尾	3	1	3
		小園		1	2
		深谷	1	1	
		吉岡			1
		不明	1		
	合計		5	3	6
寒川	寒川	一之宮			5
		田端	1		4
		中瀬	1	4	
		岡田	1	3	1
		小動	1		
		倉見	2	5	3

第Ⅴ表　昭和8年平塚市・座間村の参詣率

市村名	昭和8年死亡者数	昭和8年参詣件数（昭8.9～9.8）	参詣率（%）
平塚市	596	89件	14.9
座間村	92	26	28.3

注：平塚市の死亡者数は『平塚市勢要覧』（昭和8年版），座間村のは，『神奈川県高座郡座間村勢一覧表』（昭和9年8月発行）による。

第Ⅳ表　昭和36年郡市別参詣率

郡市名	昭和36年死亡者数	昭和36年参詣件数（36.2－37.1）	参詣率（%）
横浜市	7922	4件	0.1
川崎市	2828	0	0
横須賀市	1822	1	0.1
三浦市	269	1	0.4
三浦郡	112	0	0
逗子市	243	0	0
鎌倉市	659	1	0.2
藤沢市	839	1	0.1
大和市	193	1	0.5
茅ヶ崎市	430	22	5.2
高座郡	390	66	16.9
相模原市	616	81	13.2
津久井郡	331	5	1.5
愛甲郡	130	28	21.5
厚木市	368	98	26.6
平塚市	705	109	15.5
中郡	577	94	16.3
秦野市	304	3	1.0
小田原市	806	1	0.1
足柄上郡	487	2	0.4
足柄下郡	403	0	0

注：昭和36年死亡者数は『神奈川県統計書』昭和36・37・38年版（神奈川県発行）による。